

Title	小島清著 低開発国の貿易：貿易開発会議への提案
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.9 (1964. 9) ,p.757(77)- 759(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19640901-0078
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640901-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

されるであろう。

- (1) 著者には、本書のほかにつきのような業績がある。Labour's Turning Point 1880—1900, 1948. 著者(の) Primitive Rebels, 1959. その他、すぐれた論文が多数あることはよく知られている。
- (2) 著者はまた、フランシス・ニュートン (Francis Newton) というペン・ネームで The Jazz Scene, 1961 (Penguin) というジャズ音楽にかんする著書がある。
- (3) この点について、筆者には、つぎのような大塚久雄教授の言葉が印象的である。「いま近代ヨーロッパにおける資本主義の成立というわれわれの当面の視点から眺めるとき、そうした世界史上の巨きな個性的な流れがおよそ次のような形をとることは周知のことと、いってよいと思う。すなわち、古代オリエントで専制諸国家という姿をとってあらわれた貢納制社会→古典古代の地中海周辺におけるギリシア、ローマなどの奴隷制社会→中世ヨーロッパとくにガリアを中心として展開された封建社会→近代西ヨーロッパとりわけイングランド、ネーデルランドを起点として生誕し拡張するにいたった資本主義社会、という世界的発展の段階的進行である(『西洋経済史講座』I 岩波書店、緒言一四頁)。またこれに関連して、スコットランド歴史学派の英国資本主義との関係も注目されるべきであって、この点については、水田洋「スコットランド歴史学派」(『経済学史講座』I 有斐閣、一九六四年所収) が面白い。」

(London, 1962, ¥ 3,000) —一九六四・六・一七—

次号目次

論 説	
社会事業の概念……………	青沼吉松
——小島栄次教授の業績を顧みて——	
第一インターナショナルと民族問題(一)……………	飯田 鼎
——マルクス主義とポーランドの解放——	
国内物価と輸出価格の変動……………	川島 楊子
資 料	
企業成長と市場構造……………	原 豊
書 評	
ケール『ベルタン——重農学派の大臣』……………	渡辺 國廣
ロイ・ハロッド編	
『発展途上にある世界における国際貿易理論』……………	深海 博明

新刊紹介

新刊紹介

宇野弘蔵著

『経 済 原 論』

今度、岩波全書の一冊として刊行された本書は、内容の基本線においては旧書(一九五三年岩波書店から上下二冊として刊行)と変わるところがない。旧書は、宇野弘蔵氏の戦前からの『資本論』研究にもとづき、『資本論』を展開の基軸として、全く独自の経済学の理論体系を提示されたものであった。しかも、その後今日にいたるまでに、宇野氏の独自の方法論である、原理論・段階論・現状分析という三段階論のうちの原理論に属する部分として、宇野経済学全体系のうちにも位置づけられるに至った。本書はかかる宇野氏自らの発展の新たな段階で旧書を改められたものである。

宇野氏の『資本論』研究は、戦後非常な注目を浴び、また多くの論者が批判を展開し

新刊紹介

た。それは、方法論、価値論(商品論)、恐慌論、商業利潤論、利子論、地代論等にわたり、あらゆる理論問題を覆っている。かかる広範な批判の展開にもかかわらず、宇野氏自身は、何ら原理論での主張を変更する必要がなかったといわれるのは何故であろうか。それは、従来の批判が、単にマルクスの展開と宇野氏の違いにのみ集中し、宇野氏の体系そのものに集中しなかったこと、および、宇野理論を克服する体系が建設されなかったことによるであろう。このような意味において、われわれは宇野氏の問題提起に積極的に取り組んでゆかなくてはならないであろう。

さて、本書は、旧書に比べて、注が新しくなり、その内容も、近年の論議を反映している。とくに著しい特徴と考えられるのは、さきにおいた例の三段階論の役割が原理論の随所において旧書に比しより、明確に論ぜられていることである。とくに段階論と原理論の区別と関連性について一層あきらかにされている。宇野氏への批判、とくにその内在的批判の中心が、原理論と段階論との関連という処にあっただけに、それに対する宇野氏の反応

は興味深いものがある。またいま一つ重要なことは、科学とイデオロギーを峻別するといふ点、したがって原理論を科学として論理的に体系づけるといふ点が本書の前提として強調されていることを看過しえない。

本書は以上のごとく、旧書よりもより原理論的なものとなつていといえよう。同時にそのことは、本書が宇野経済学の原論であつて、マルクス経済学の原論ではないということもあきらかにするであろう。われわれはこの『経済学』を、われわれの直面する現代の課題を追求するうちにおいてのみ正しく評価しうることにある。また、それ以外に克服し創造的発展の道はない。(岩波全書・一九六四年五月刊・二二七頁・三五〇円)

—飯田裕康—

小島 清著

『低開発国の貿易』

——貿易開発会議への提案——

一九六〇年代は南北問題の時代であるといわれており、それを象徴する動きとして、国

七七 (七五七)

連では、この六〇年代を「開発の二〇年」と名づけ、また世界全体として本問題を論議するために、国連貿易開発会議が開催された。勿論、低開発国の開発・貿易振興の問題は、

とを目的としている。序に教授自身が明確に整理されているように、本書で論究されている問題は次の三つである。

目新しいものではなく、第二次大戦後、東西問題とともに大いに論議され、努力がそがれてきたが、この問題が六〇年代に入って新しくとりあげなおされ、その再検討、新展開が行なわれんとしているのである。従来低開発国の開発の問題は資本形成を決定的要因とし、援助を中心として考えられてきたが、最近では、援助とともに貿易の意義を見直し重視するようになってきている。すなわち「貿易よりも援助を」から「援助よりも貿易を」より適切には、「貿易も援助も」の主張への移行である。

第一は、低開発国の貿易パターンを析出し、その特徴とか弱点を明瞭ならしめることである。そのためには、教授が案出された周知のN・L・Cの集約性にもとづく三つ（さらに細かくは八つ）の商品分類、貿易結合度、水平的貿易度係数を用い、アメリカ・日本・東南アジアの三角貿易（第一章）と、先進国間貿易のパターン（第二章）の分析を行ない、世界貿易の潮流が高度工業国間の工業品（とくに重化学工業品）における水平的貿易の急速な発展・拡大にあり、低開発国は、かかる水平的貿易に殆んど参加することができず、第一次商品を輸出し、工業品を輸入するという垂直的貿易に圧倒的に依存していることに困難の中心が存することを明示する。

開発国の第一次商品輸出の困難性、脆弱性、不安定性を解剖し（第三章）、だからこそ低開発国も工業品輸出に活路を見出さねばならないという必然性、ならびに工業品輸出振興の方策を究明する（第四章）ことである。ここでとくに注目されるのは、第一次商品交易条件の長期的下降傾向と上方硬直性および短期的大幅不安定性の指摘とその原因の解明、ならびに工業品輸出振興のための直接的生産目的贈与である。

小島教授の本書は、このような世界経済の新展開・要請にに応じて、理論の筋を通して本問題を究明し、その問題の本質・現状・原因、その解決のための方策も明らかにし、とくに本書の副題にもあるように、国連貿易開発会議への積極的なユニークな提案を行ない、本問題に関する理解と関心を高めるこ

第二は、第一の分析からも結論されるように、低開発国もまた今後は世界貿易の発展の主流たる工業品間貿易に部分的にでも乗っついていかなければならないのであり、まず、低開

第三は、低開発国経済発展の最も有望な一つの解決策として経済統合とか共同市場結成のねらい、原理、方策、可能性をさぐることであり、中南米（第五章）と東南アジア（第六章）について検討がなされている。

以上が本書の構成・主要内容であるが、全体を貫く一つの特徴は、その分析が一九世紀と二〇世紀とにおける世界貿易の原理的転換、比較優位決定因の変化(L・I・N型の分業からL・I・C型の分業への移行)に裏付けられており、一つの貫いた理論の基礎になされているということである。そしてその結果として、南北問題解決の、とくに低開発国の貿易

振興・発展の方向も、一義的に、勿論第一次商品の輸出拡大の重要性を無視するわけではないが、低開発国貿易を水平的貿易化の線に組み入れることをおいてほかにないのである。

の離陸が果され、さらに景気循環対策としても有用なのである。この提案は、従来の人道的ないしは理念的動機による援助ではなくて、経済的合理性、経済的論理にもとづくものであり、世界全体としての資源の有効利用、国際分業と構造調整の促進、ひいては世界経済の安定成長に貢献するものである。またこの提案が、通商面、国際貿易の分野では、自由貿易原則にできるだけのとり、プ

本書においても、教授の他の著作と同様に、多数の独創的なかつ有用な理論ないし分析、新しい事実の発見、注目すべき提案が存在しているが、ここでは、本書の結論をなし、国連貿易開発会議へのユニークな提案でもある直接的生産目的贈与をとりあげる。この提案は、今後一〇年間に、先進国は、従来の人道主義的援助ないし基礎構造援助にかえて、たとえば総額二五〇億ドルぐらいの低開発国の直接的生産活動に役立つ機械、設備、化学肥料その他の資本財を贈与すべきであることを主要内容とする。

ライズ・メカニズムを活用し、その前の段階たる生産の分野での特惠措置II贈与が必要であるという考えに基礎づけられているのである。しかし不幸にして本提案は、国連貿易開発会議ではとりあげられることなく終っている。

この直接的生産目的贈与により、先進国では、重化学工業の拡大、労働集約的軽工業と農業の構造調整、低開発国品への市場開放が刺戟促進され、他方低開発国側では、適格工業の設立拡大、農業の生産性改善、それらの輸出拡大、そして自立的・持続的経済発展へ

は、雑誌その他に既発表のものではあるが、いつもながら教授の独創性、すぐれた着想力、現実の世界経済の問題を理論の筋を通して解明していこうとする意欲と積極性には、ただただ感服させられるばかりであり、われわれも現実的要請に答えての理論の発展を目指して、一層の努力が必要であらう。しかし残

された問題も多くある。教授自身も、水平的貿易の原理、動態的な国際分業原理の究明、水平的貿易の形態論を乗り越えて動因論への前進の必要性を強調されている。これが基本的問題であり、国際分業理論の動学化が必要であることには異論はないが、このような形態的水平的分業が従来の理論の否定を意味するのかどうか、実証的にみても水平的貿易への転換、第一次商品の軽視が正当か否かも問題であろう。さらに本書におけるすぐれた構想ないし分析の一層精緻な体系的な深化・発展が必要とされているように思われる。教授の一層の研究を期待するとともに、南北問題、低開発国貿易問題の所在・原因・対策を理解するための重要な理論書・啓蒙書として、本書の一読を是非おすすしたい。(国元書房・昭和三九年五月刊・A5・三六二頁・一一〇〇円)

— 深海博明 —